

ファミリーパートナーシップに基づく育児支援講習会の効果

著者	三国 久美, 草薙 美穂, 澤田 優美, 齋藤 早香枝, 岡光 基子, 矢郷 哲志, 廣瀬 たい子
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
巻	24
ページ	31-36
発行年	2017-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064515/

<研究報告>

ファミリーパートナーシップに基づく育児支援講習会の効果

三国 久美^{*1}、草薙 美穂^{*2}、澤田 優美^{*3}、齋藤早香枝^{*4}、
岡光 基子^{*5}、矢郷 哲志^{*5}、廣瀬たい子^{*6}

抄録：

目的：ファミリーパートナーシップに基づく育児支援講習会（FPM講習会）を実施し、この講習会を受けた看護職に与えた効果を明らかにする。

方法：FPM講習会を受けた看護職11名を研究参加者とした。講習会の終了後に講習会の評価に関する自記式質問紙調査を実施し分析した。

結果：FPM講習会を受けたことにより、大多数の研究参加者が「子どもに関する知識とスキルが高まった」と回答した。また、講習会の受講により受講者の実践がどのように変わるかを尋ねたところ、「親の主体性を尊重するようになる」、「親の話に傾聴するようになる」、「親の強みとニーズを理解できるようになる」などの肯定的な回答があり、FPM講習会の効果が確認された。一方、「私はPGを効果的に使用するために必要な資質とスキル、知識を持っている」という問いに「とてもそう思う」と回答した者はいなかった。さらに「学んだことを使用する自信がある」という問いに「とてもそう思う」と回答した者はおらず、「あまりそう思わない」と4人の受講者が回答した。

考察：FPM講習会を受講した看護師は、講習会の受講により、FPMの鍵となる概念を理解し、自身の育児支援に取り入れることができるようになったと考える。しかし、看護師自身の資質、スキルや知識に自信が持てない現状が推察されたため、講習会の内容や運営方法を再検討するとともに、受講後の受講者へのサポート体制を整える必要性が示唆された。

キーワード：育児支援、ファミリーパートナーシップモデル、講習会、看護職

I. はじめに

日本において、児童虐待は、増加の一途をたどっている。児童相談所における虐待相談の内容別にみると、2006年度では身体的虐待が41.2%と最も多かったが、心理的虐待が年々増加し、2016年度の速報値では、51.5%と最も多くなった（厚生労働省，2017）。心理的虐待が増加した要因のひとつに、親が子どもの目の前で配偶者らに暴力をふるう「面前DV（ドメスティック・バイオ

レンス）」の通告の増加が挙げられている。

近年、虐待を受けた体験が子どもの脳に不可逆的なダメージを与えること、その部位は虐待のタイプにより異なることが明らかになっている（友田，2012）。また、幼少期に受けたネグレクトや身体的虐待、性的虐待などの過酷な体験が、脳の機能に悪影響を及ぼし、その後の不適切な生活習慣や薬物乱用などの反社会的な行動につながり、ひいては寿命を縮めるリスク要因になることも明らかになっている（Felitti, et al., 1998）。さらに、虐待が世代間連鎖することも知られている（久保田，2010）。このように、児童虐待は、長期にわたり、子どもや家族、社会に悪影響を及ぼす。

児童虐待の予防のための対策は急務であり、そのためには、妊娠期あるいは出産後早期からの親への育児支援が重要である。さらに、「面前DV」の予防のために、両親を対象とした健全な夫婦関係を保つための支援が必要

*1 看護学科母子看護学講座

*2 日本医療大学

*3 天使大学

*4 札幌保健医療大学

*5 東京医科歯科大学

*6 東京有明医療大学

である。しかし、日本において、これらの支援を包括した取り組みは十分ではない。また、これらの支援に取り組む看護職のための体系的な教育プログラムも見当たらない。

英国では、妊娠期や育児期の家族を支援する看護職を対象にファミリーパートナーシップモデルに基づく育児支援講習会（以下、FPM講習会）が開催されている。この講習会は、乳児の早期発達および夫婦が親になることの移行を促進し、専門家と親が共に乳児や家族のニーズの解決に取り組むことを目的に開催され、児童虐待予防のために用いることができる。日本においても、子どもと家族を支援する看護職を対象にFPM講習会を開催し、その効果や課題を明らかにすることは、児童虐待の予防のための取り組みを推進する一助になると考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、FPM講習会を実施し、この講習会を受けた看護職に与えた効果を明らかにすることである。

III. 研究方法

1. FPM講習会の概要

FPM講習会では、プロモーションガイドシステムと呼ばれる妊娠中から出産後までの一貫した支援システムのトレーニングを行い、子どもと家族の支援者が家族のニーズをより理解し、優れた支援ができるようになることを目指す。このプロモーションガイドシステムの基盤となる理論的枠組みには、アタッチメント、エコロジカルモデル、ソーシャルサポートとソーシャルキャピタル、自己効力感、成人学習理論など様々な理論や概念が用いられている。また、このガイドシステムを活用する上で基礎となる枠組みはファミリーパートナーシップモデル (Davis & Day, 2010) である。FPM講習会では、パートナーシップを実現するために支援者に求められる資質の5つのキーとなる概念である“Listen”“Empathy”“Shared-understanding”“Summarize”“Strategies and actions”の頭文字をとった「LESSS」を基盤に置いた支援を学ぶ。

本研究では、著者らがFPM講習会の開発者であるDay氏が主宰するトレーニングプログラムを受講し、Day氏の承諾を得たうえで日本の実情に合った講習内容を検討し、講習会を開催した。また、本研究では、主に産後早期の家族の支援を担う看護職を想定した内容を取り入れ、DAY 1とDAY 2の2日間からなるFPM講習会を開催した。講習会の参加者のリクルートのために、小児看護の商業誌に講習会のお知らせを掲載して募集すると

もに、機縁法により、母子保健活動を行っている看護職に講習会の案内を行った。FPM講習会の内容を表1に示した。

表1 FPM講習会の内容

DAY 1 (1日目)
・胎児・乳幼児の発達科学による知見の概要 ・妊娠および胎児・乳幼児の発達に対する親・家族の影響 ・ファミリーパートナーシップモデルとは ・産前産後の家族へのコンタクトを考える ・産前・産後プロモーションガイド (PG) の概要 ・参加者がペアになりPGを用いた実践の練習
DAY 2 (2日目) ※DAY 1の1か月後に実施
・DAY 1で学んだことの振り返り ・産後プロモーションガイド (PG) を使用した経験の共有 ・支援のためのエコロジカルモデルの活用 ・Strengths & Needs サマリーの使用 ・プロモーションガイドシステムの使用を継続するために必要な支援とは

2. 研究方法

1) 研究参加者

2015～2016年に著者らが開催したFPM講習会を受けた看護師11名を研究参加者とした。

2) データ収集方法

FPM講習会のDAY 1およびDAY 2の終了後に、講習会の評価に関する自記式質問紙を配布し、その場で回収した。

3) データ収集項目

(1) 研究参加者の属性

看護職として有する資格、仕事内容を尋ねた。

(2) DAY 1 終了時の評価

①DAY 1で学んだ内容、②産後の親子への支援にプロモーションガイド (以下、PG) はどのように役立つと考えるかを自由記載で尋ねた。

(2) DAY 2 終了時の評価

①プロモーションガイド (PG) の評価

PGを用いることにより、「家族支援を効果的にする」「家族は利益を得る」「個々の家族のニーズを見つけて対処することに適している」などの7項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの6段階で回答を得た。

②FPM講習会の評価

講習担当者の対応や講習の構成、内容など11項目について4段階もしくは5段階で評価を得るとともに、受講によって自分の実践がどのように変わるとするか、良かった点や悪かった点などについて自由記載で回答を得た。

4) 分析方法

記述統計を実施した。また、自由記載で得た内容は、類似するものをまとめた。

3. 倫理的配慮

研究に先立ち、北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会の承認を受けた（承認番号：14N038038）。また、研究参加者には、研究の概要、研究協力による利益と不利益、研究協力の任意性と撤回の自由、個人情報保護の厳守、研究成果の公表、データの保管方法について、口頭と書面で説明し、同意書に署名を得た。

IV. 研究結果

1. FPM講習会の受講者の属性

受講者は合計11名で、市町村で勤務経験のある保健師4名、母子訪問指導員4名、産科で勤務経験のある助産師2名、小児科で勤務経験のある看護師1名であった。

DAY 1は11名が、DAY 2は1名が参加できず、10名が参加した。

2. FPM講習会の評価

1) DAY 1 終了時の評価

①DAY 1で学んだ内容を表2に、②産後の親子への支援にPGはどのように役立つと考えるかを表3に示した。学んだ内容として最も多く記載されていたのは「子どもの成長発達に影響を及ぼすものは何か」および「親を支援するためのスキル」（8人）であり、役立つと思った内容で多かったものは、「父母の思いをとらえ、引き出す」（8人）であった。

2) DAY 2 終了時の評価

①PGの評価を表4に示した。PGを用いることによ

表2 FPM講習会のDAY1に参加して学んだ内容

学んだ内容（記載人数）	実際の記載内容の例
子どもの成長発達に影響を及ぼすものは何か（8人）	・妊娠期の父母の関係性や周囲の環境が、児の健康な成長発達にいかんにか大切かを知った。 ・妊娠期からの母親のストレス状況も胎児に影響を与える。 ・胎児から乳児期の良好な関わりが、いかにその後の成長・発達に大切かということを知った。 ・小児期の逆境的経験は、生涯に渡って健康に影響すること、だからこそ乳幼児期の支援が重要という根拠を学ぶことができた。
妊娠中から親になるための準備をすることおよびそのための支援の重要性（3人）	・妊娠期から母親（父親）になるための準備をすることは大切である。 ・妊娠期からのかわりの大切さをより理解することができた。
父親も含めた両親への支援の重要性（3人）	・自分の活動は「母と子のために」という目的で、夫はよき支援者であってくれれば良いと思っていましたが、今回のお話を聞き、夫のためのサポートも必要ということがよくわかりました。
親を支援するためのスキル（8人）	・父母と共に考えながら悩みに対処していくことが大切なのだ学びました。 ・「LESSS」の姿勢で対話することが大切であると学びました。 ・対象者を「こうあるべきだ」と考えず“見方をかえる”“対象の立場に立ったものの見方”になることが必要。 ・支援者は、常に親との間にズレがないか、親が見えているものは何かを考えながら関わる大切だと思いました。

※自由記載による回答

表3 産後の親子への支援にプロモーションガイド（PG）はどのように役立つか

どのように役立つか（記載人数）	実際の記載内容の例 ※（ ）は著者による補足
父母の思いをとらえ、引き出す（8人）	・（父母から話を）聞き取るための引き出しが増えて嬉しく思っています。 ・トピックを提示し焦点を絞ることで、母親から話を引き出しやすいと思う。 ・自分本意に話をすすめていくのではなく、PGを利用することで親の話したいこと、聞いてほしいことに焦点をあて話すことができるというのが、いいなあと思いました。
父母の育児の能力を高める（3人）	・父母自ら育児の悩みに対処しようとする能力を育てることができると思います。 ・支援者の傾聴や共感的理解によって、母親は育児に自信や自己効力感が増すことにつながると思いました。
看護職の経験に影響されない支援が可能になる（1人）	・経験に関係なく、評価・支援ができる。
対象者の利益につながる（1人）	・産前・産後のサポートにはいろいろな方法があるが、適材適所で利用することで利用者の利益につながると思う。

※自由記載による回答

表4 プロモーションガイド（PG）の評価

N=10

質問項目	とても そう思う	そう思う	多少 そう思う	あまり そう思わない	そう 思わない	全く そう思わない
Q1：PGは家族支援を効果的にする	4	4	2	0	0	0
Q2：PGを使用することで家族は利益を得る	2	6	2	0	0	0
Q3：PGは家族にとってわかりやすく使いやすい	1	2	5	1	1	0
Q4：PGは個々の家族のニーズを見つけて対処することに適している	1	5	4	0	0	0
Q5：私は家族支援にいつもPGを使いたい	0	4	4	2	0	0
Q6：PGは私が支援している家族のアプローチに適している	0	2	3	4	0	1
Q7：私はPGを効果的に使用するために必要な資質とスキル、知識を持っている	0	1	7	2	0	0

（単位：人数）

り、「Q1：家族支援を効果的にする」「Q2：家族は利益を得る」「Q4：個々の家族のニーズを見つけ対処することに適している」の3項目では、10人全員が「とてもそう思う・そう思う・多少そう思う」という肯定的な回答だった。一方、「Q6：PGは私が支援している家族のアプローチに適している」では「あまりそう思わない・全くそう思わない」と5人が回答した。また、「Q7：私はPGを効果的に使用するために必要な資質とスキル、知識を持っている」という問いに「とてもそう思う」と回答した者はいなかった。

②FPM講習会の評価

講習内容や構成、講習担当者の熱心さなど11項目に対する評価を表5に示した。多くの項目で高い評価を得たが、「Q9：学んだことを使用する自信がある」では4人が「あまりそう思わない」と回答した。また、「Q4：自分の日々の実践に役立った」では、2人が「あまりそう思わない」と回答した。

「FPM講習会の受講によってあなたの実践がどのように変わるか」という問いには、「親との会話において主体性を尊重し、傾聴する」、「対象者の強みとリスク・弱みの双方に目を向けて支援する」などの記載があった(表6)。

また、良かった点や悪かった点などについて自由記載

で回答を得たところ、良かった点として、「参加者間で話し合いながら考えたり、意見交換ができたこと」(6人)、「受講者の理解を確認しながら進めてくれたこと」(1人)、「大切なポイントや観点を整理しながら進めてくれたこと」(1人)、「今までの経験を振り返ることができた」(1人)、「全て」(1人)などの記載があった。悪かった点として、「産後を中心とした内容だったが産前の内容もあるとより理解しやすかった」(1人)、「DAY1とDAY2の間にPGを実践する機会が持てなかった」(1人)という記載があった。

V. 考察

本研究参加者の多くが、FPM講習会のDAY1終了時に「子どもの成長発達に影響を及ぼすもの」、「妊娠期からの親になることの準備の必要性とそのための支援の重要性」を学んだと回答した。DAY1では、育児支援を行う上で土台となる知識として、これらに関連するエビデンスの高い先行研究の知見を紹介しており、このことが受講者にとって新たな知識の獲得につながったと考える。また、多くの受講者から得られた評価に、「親を支援するためのスキル」が学べたことや、PGは「父母の思いをとらえ、引き出すのに役立つ」ことが挙げられた。ファミリーパートナーシップモデルのキーとなる概

表5 FPM講習会の評価

N=10

質問項目	非常に そう思う	少し そう思う	若干/ わからない	あまり そう思わない	全く そう思わない
Q1：自分が尊重されたと感じた	8	2	(選択肢なし)	0	0
Q2：自分の話に耳を傾けてもらった	8	2	(選択肢なし)	0	0
Q3：講習担当者は熱心だった	10	0	(選択肢なし)	0	0
Q4：自分の日々の実践に役立った	4	3	1	2	0
Q5：胎児期と乳幼児期のスキルと知識を高めた	1	9	0	0	0
Q6：生後早期の育児に関するスキルと知識を高めた	2	7	1	0	0
Q7：産後のPGに関するスキルと知識を高めた	3	5	2	0	0
Q8：NEEDS CHECKLISTに関するスキルと知識を高めた	1	8	1	0	0
Q9：学んだことを使用する自信がある	0	6	(選択肢なし)	4	0
Q10：この講習会は良く構成されている	3	6	1	0	0
Q11：この講習会を同僚に勧めたい	7	2	1	0	0

(単位：人数)

表6 FPM講習会の受講によってあなたの実践はどのように変わるか

実践がどのように変わるか	実際の記載内容の例
対象者である親との会話において、主体性を尊重し、傾聴する	・対象者が一番話したいことが話せるように意識して関わること。 ・質問ではなく、相手の話を傾聴すること(主導権を握らない)。
対象者の強みとリスク・弱みの双方に目を向けて支援する	・相手のリスク・ニーズだけに目を向けすぎずではなく、ツールを使用し、相手の強みを理解できるようになること。 ・強み・ニーズを整理して事例をとらえる。
援助の対象者がどのような視点(constructs)を持っているかを考えて関わる	・相手と自分が同じ見方をしているとは限らない。そこを確認すること。 ・Constructsの視点を大切にする。
その他	・母子の支援だけでなく、父・家族への視点を持つ。 ・妊娠期・新生児期の支援の重要性を理解して支援に取り組めるようになる。 ・早期の赤ちゃんへのかかわりが、いかに大切なのかを理解し、支援者へ伝えていくこと。

※自由記載による回答

念である5つの概念の頭文字をとった「LESSS」について、説明したうえで、それを頭において受講者同士でPGを使った演習を行ったことにより、単なる知識にとどまらず、スキルの修得が可能になったことが推察された。

DAY2終了時に、受講者の大多数からPGに対する肯定的評価が得られたものの、「私が支援している家族のアプローチに適している」と回答した者は、半数と少なかった。この理由には、PGを利用して子どもと親を支援するためには、1つのトピックを話題にした対話に、少なくとも10分程度の時間が必要であり、病棟や外来などで勤務する受講者にとって、そのような時間の確保が難しいことが考えられた。

FPM講習会の参加を通して、「自分が尊重されたと感じた」、「自分の話に耳を傾けてもらえた」という肯定的な評価を得た。さらに、良かった点として「参加者間で話し合いながら考えたり、意見交換ができたこと」、「受講者の理解を確認しながら進めてくれたこと」という回答を得た。これらは、ノールズによる成人学習理論で触れられている成人学習のための7つの原理に含まれる内容であり(鈴木, 2015)、FPM講習会で、理論的枠組みとして成人学習理論を用いた成果が示されたと考える。

FPM講習会の評価で、課題が残ったのは、「学んだことを使用する自信があるか」という問いに10人中4人が「少しそう思わない」と否定的な回答をしたことである。また、「PGを効果的に使用するために必要な資質とスキル、知識を持っている」という問いに「とてもそう思う」と回答した者はいなかった。FPM講習会では、知識の修得のみならず、優れた支援ができるようになること、つまり行動変容を目指している。本研究では、講習終了後の受講者の行動変容まで確認していないが、これらの結果は、学んだことを日々の育児支援に取り入れる自信が持てず、行動変容に至らない受講者がいる可能性を示している。「行動変容のためには、最も大切にしなければならないのは現場の上長(受講者の直接の管理職)である」(鈴木, 2015, p82)ことから、職場の環境や上司や同僚の理解が得られそうにないことがこの結果に影響した可能性もある。また、行動変容を可能にするには、研修終了直前にアクションプランを作成することが有効であることが指摘されている(鈴木, 2015)。今後、FPM講習会の受講者が自信をもって学んだことを活用し、行動変容できるようになるためには、受講者が自信を持てるような講習内容や方法の工夫のみならず、講

習会の終了時に、アクションプランを作成してもらうことや、現場に戻ってからの受講者へのサポート体制も含めた検討が必要である。

本研究の限界として、研究参加者が11名と少ないこと、明らかになった効果は、講習会終了時点までの短期的なものであることが挙げられる。また、リクルートの方法から、育児支援に関して意識の高い看護職が講習会に参加していたことが推察され、選択バイアスが生じた可能性を踏まえて結果を解釈する必要がある。今後はさらに、研究参加者を増やすとともに、FPM講習会を受講した看護職を対象として長期的な評価を検討することが望まれる。また、支援の対象者である乳幼児とその家族に与える効果を明らかにすることも今後の課題である。

本研究に参加いただいた皆様に心よりお礼を申し上げます。また、FPM講習会の開催や教材などの研究への使用を承諾いただき、支援いただいたCrispin Day氏に心よりお礼申し上げます。

なお、本研究は、科学研究費・基盤(B)課題番号26293488の助成を受けて実施した。また、本研究の一部をTNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017で報告した。

文献

- Davis H, Day C. : Working in partnership with parents. 2nd Edition Pearson: London, UK, 2010.
- Felitti V. J., Anda R. F., Nordenberg D., Williamson D. F., Spitz A. M., Edwards V., Koss M. P., Marks J. S. : Relationship of childhood abuse and household dysfunction to many of the leading causes of death in adults, the adverse childhood experience (ACE) study, Am J Prev Med, 14 (4), 245-258, 1998.
- 厚生労働省:平成28年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数(速報値) <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujoudoukateikyoku-Soumuka/0000174478.pdf> (2017年9月21日閲覧)
- 久保田まり:児童虐待における世代間連鎖の問題と援助的介入の方略:発達臨床心理学的視点から,季刊・社会保障研究, 45(4), 373-384, 2010.
- 鈴木克明:研修設計マニュアル,人材育成のためのインストラクショナルデザイン,北大路書房,京都,2015.
- 友田明美:新版いやされない傷,児童虐待と傷ついていく脳,治療と診断社,東京,2012.

Effects of a seminar on childcare support based on the Family Partnership Model

Kumi MIKUNI^{*1} Miho KUSANAGI^{*2} Yuumi SAWADA^{*3} Sakae SAITO^{*4}
Motoko OKAMITSU^{*5} Satoshi YAGO^{*5} Taiko HIROSE^{*6}

Abstract

Objectives: To identify effects on nurses who attended a seminar on Family Partnership Model-based childcare support.

Methods: Participants were 11 nurses who attended a seminar on FPM-based childcare support. After the seminar, a survey was conducted to assess the effects of the seminar through a self-completed questionnaire.

Results: Many respondents answered, “My knowledge and skills of infants increased” by attending the seminar. Regarding changes before and after the seminar, there were answers such as “I now attentively listen to what the parents say,” and “I now respect the parents’ views.” Meanwhile, to the statement “I have enough qualifications, skills, and knowledge to use the Promotional Guides effectively in practice,” no one responded, “I strongly think so”. And furthermore, to the statement “I feel confident in making use of what I have learnt,” four respondents answered, “I don’t particularly think so”.

Discussion: By attending the seminar, the nurses understood the key concepts of FPM and learned to incorporate these concepts into their childcare support. However, the study suggests that the nurses presently lack confidence, indicating the necessity to continue to provide attendees with support on a regular basis even after the seminar.

Keywords: childcare support, Family Partnership Model, seminar, nurse

* 1 Department of Maternal and Child Nursing

* 2 Japan Health Care College

* 3 Tenshi Collage

* 4 Sapporo University of Health Sciences

* 5 Tokyo Medical and Dental University

* 6 Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences